

ポスト「よい子」の対話的自己エスノグラフィー

—アイドル活動による革命に焦点をあてて—

Dialogical autoethnography of post"good child"

-Focusing on the revolution through activities as idol-

○柳川日和 斎藤清二

Hiyori YANAGAWA Seiji SAITO

立命館大学 総合心理学部

College of Comprehensive Psychology, Ritsumeikan University

Key words: よい子、よい子問題、過剰適応、自己不全感、本来感、対話的自己エスノグラフィー

目的

学業や家庭や社会生活において、大きな問題を起こすことなく一見適応的に生きている「いわゆるよい子」が、発達や成長の過程においてさまざまな問題や病理を呈するという事は多くの研究者によって指摘されてきた(浅井, 2012; 風間, 2017)。

しかし、既存の「よい子」研究の多くは、よい子の問題を過剰適応の問題であるとする観点から行われており

(石津・安保, 2009; 桑山, 2003)、過剰適応がよい子の本質であるのか結果であるのかといった疑問を含め、不明な点が多い。また、当事者である「よい子」が実際に自分自身の問題をどのように体験し意味づけているのか、そしてどのようにして自身の問題を乗り越えようとしているのかといった、主体としての当事者の視点はほとんど扱われていない。そのため「よい子」が抱える問題への適切な支援や予防の方策は未確立のままである。

本研究では、当事者の視点を通して、よい子がどのような自らの問題を認識し、それを乗り越えようとしているかのプロセスを描き出し、よい子問題への支援と予防のために役立つ仮説を生成することを目的とする。

方法

本研究では、「よい子」の当事者である研究者(発表者1)自身の経験をその対象として質的に分析する。研究方法としては、対話的自己エスノグラフィー(沖潮(原田), 2013, 2016)を採用した。研究の具体的な手順として、まず研究者は研究協力者(指導教員: 発表者2)から、探索的なナラティブ・インタビュー(1回60分×4回)を受けた。インタビューの内容は録音し、逐語化した。次いで、逐語化されたテキストについて、指導教員との対話による検討を行い、その内容のメモと録音された記録を分析データに加えた。これらのデータをもとに、筆者は自身のライフストーリーとその意味付けについて分析を進め、自己エスノグラフィーの形式で執筆していった。さらに執筆された暫定的な内容について指導教員との対話を繰り返した。

結果と考察

親の価値観は、ときに子どもの自由を奪う枷となり、子ども自身もそれに準ずる枷を自らに嵌めてしまう。研究者の場合、偶然にも、アイドル活動によってこの自らの枷が解かれ、またアイドル活動を通して親の枷をも打ち砕く術を身につけることができた。

研究者にとってのアイドル活動は、「よい子問題」を引き起こす原因となったさまざまな信念を変化させるきっかけとして働いており、対話的自己エスノグラフィーを通じて「よい子問題」の解消を信念の変化を通してもたらされる過程として描き出すことができた。その結果、①「よい子問題」の中核は過剰適応というよりはむしろ本来感の欠如と自己不全感である、②「よい子」から「ポストよい子」への移行プロセスは、「よい子が生きる世界」の拡張に伴い、親の価値観の影響を強く受けた不合理な信念が変容することを通じて、本来的な自己感が再獲得されていく過程である、③上記の変容過程が段階的に進行する場として「アイドル活動」などを含む「その人にとっての『いけないこと』」を自発的に選択することが有効に機能している可能性がある、といった仮説が生成された。

参考文献

- 浅井継悟 (2012). 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 60, 2, 283-294.
- 石津憲一郎・安保英勇 (2009). 教育心理学研究, 57, 442-453.
- 沖潮(原田)満里子 (2013). 質的心理学研究, 12, 157-175.
- 沖潮(原田)満里子 (2016). 発達心理学研究, 27, 125-136.
- 風間淳希 (2015). 青年心理学研究, 27, 23-38.
- 桑山久仁子 (2003). 京都大学大学院教育学研究科紀要, 49, 481-493.